

令和 7 年度第 1 回屋久島世界遺産地域科学委員会
ヤクシカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議
議事要旨

日時：令和 7 年 7 月 7 日（月）14:00～17:00

場所：屋久島町役場議場やくしまホール

■議事(1)ヤクシカの生育状況等について

資料1－1(鹿児島県)

✓ ヤクシカの生息状況調査について

- ・鹿児島県が説明した資料1-1「令和6年度のヤクシカの生息状況について」は、令和6年第2回ヤクシカ WGで提示された資料の確定値であるか。（矢原委員長）

→その通りである。（鹿児島県 牛之濱係長）

資料1－2(林野庁)

✓ ヤクシカの生息状況調査について

- ・令和6年度の合計捕獲数が減少している点について、今後の推移を見ないと正確な判断はできないものの、全体として増加し続けている状況ではないという認識でよい。（矢原委員長）

■議事(2)捕獲等の被害防止対策について

資料2－1(屋久島町)

✓ SFTSと捕獲者体制について

- ・SFTSに関して、タヌキの陽性率と人患者数の関連が報告されており、継続調査が必要である。また、ダニ媒介感染症が観光の風評被害をもたらす懸念があるため、ガイドへの周知も重要である。（鈴木委員）

- ・狩猟者の高齢化が進む中、専従捕獲者の確保を検討すべき時期である。環境省には、その高度な捕獲技術体制と現場での実施方法について検討を求める。（鈴木委員）

✓ タヌキの被害とSFTS感染リスクについて

- ・被害金額におけるタヌキの被害状況はどのように把握されているのか？（手塚委員）

→屋久島町職員が農家への聞き取りと現場確認を行い、被害面積から金額を推定している。タヌキによるタンカン・ポンカン枝葉への被害は令和4年から確認され、被害金額が増加した。（屋久島町 松田課長）

- ・令和6年度も被害金額が増加しているが、農家は被害増加に対しどのような印象を持っているか？（手塚委員）

→農家からもタヌキが増加しているとの声があり、農産物被害を懸念している。（屋久島町 松田課長）

- ・タヌキによる被害が増加する可能性があるなら、今後タヌキの問題を位置づけていく必要がある。（手塚委員）

- ・SFTSはダニ媒介感染症であり、タヌキからも直接感染する可能性がある。捕獲従事者の衛生管理の普及啓発も重要である。（鈴木委員）

✓ 森林の実りと鳥獣被害の関係

- ・昨年度はヒヨドリやサル被害が大きかったが、昨年末に西部林道を歩いた際、この10年で最も森の果物がなかった。森の実りの少なさがヒヨドリやサルの農作物被害に影響している可能性を考慮する必要がある。（湯本委員）

- ・西部林道の実りの関係では、サルが食べるタブノキやアコウの実について、イチモンジハムシが多発し実りが悪い地域もある。その因果関係を環境省で調べてほしい。（荒田委員）

資料2-1～2-4（屋久島町）

✓ 鳥獣被害の範囲と要因

- ・資料2（資料2-1～2-4）の被害額について、サルやシカの被害は特定の集落や地域に集中しているのか、それとも島全体に広がっている印象なのか？（杉浦委員）

→サルの被害は昨年8月末の台風10号以降、特定の集落に限定されず島内全域から確認されており、シカの被害も全島的な発生である。（屋久島町 真辺主事）

- ・全島的にさまざまな被害が出ている感じか？（杉浦委員）

→ご指摘のとおりである。（屋久島町（真辺主事））

- ・被害額が桁違いに増えていることから、局所的ではなく全島的に被害が生じていると考える。台風10号と果実の不作が重なった影響が大きいと感じる。（矢原委員長）

- ・台風10号通過後、西部林道の自然林の風景はかなり変わり、相当の木が倒れ、大枝も落ちるなどの被害があった。これも影響している印象である。（湯本委員）

- ・西部地域でモニタリングしているが、鳥獣被害につながるようなデータは含まれているのか？（矢原委員長）

→ポイント調査なので、森全体を把握するには積み上げが必要である。（湯本委員）

→衛星データなどで葉の量などから被害状況を把握できる可能性があると考え。（矢原委員長）

資料2-7(鹿児島県)

✓ 鹿児島県のヤクシカ対策について(シカの年齢査定)

- ・シカ年齢構成について、屋久島ではセメント質の年輪が信頼できないため、今後はセメント質の年輪、歯の摩耗、歯の硬質硬化の3つを突き合わせ、年齢査定の機会を検討してほしい。（鈴木委員）

✓ 鹿児島県のヤクシカ対策について(捕獲シミュレーション)

- ・糞粒法による個体数推定の結果に基づく捕獲シミュレーションでは捕獲目標が毎年大きく変動してしまい、計画遂行に支障をきたす可能性がある。年ごとのシミュレーションによる目標の管理計画上の位置づけはどのようになっているのか。（濱崎委員）

→シミュレーションは第二種特定鳥獣管理計画の具体的な数値目標ではなく、計画目標は「令和15年度に令和5年度の目標個体数を半減」である。（鹿児島県 牛之濱係長）

- ・シミュレーション結果の変動が大きいと誤解を生むため、注釈付き説明を提案。階層ベイズモデル導入や複数の指標（糞粒法、糞塊密度、CPUE、メッシュごとの捕獲数）を用いた捕獲目標設定精度の向上に取り組んでほしい。（濱崎委員）

■議事(3)森林生態系の管理目標

資料3-1、3-2(林野庁)

質疑なし

■議事(4)特定エリアの対策(西部地域)について

資料4-4(鈴木委員)

✓ SFTSウイルスとヤクシカ・タヌキの関係

・シカではウイルスが増えないというのは、どの程度確かなのか。(矢原委員長)

→環境省の推進費により全国的に調査が実施されているが、シカは抗体を持っていてもウイルスが検出されないケースが多く、その確実性は高い。一方で、タヌキやアライグマは動物の体内でウイルス陽性個体が多いことが確認されており、信頼性の高い情報である。(鈴木委員)

・シカに付着しているダニからSFTSウイルスが検出されることはあるか。以前の調査ではシカに付着するダニからウイルスが検出されたケースがあった。(矢原委員長)

→今回の調査では検出されなかった。他の地域でもシカに付着するダニからはSFTSウイルスは検出されていない。シカからの直接感染ではなく、他の機会にダニを介して感染した場合はあると考える。

(鈴木委員)

・抗体陽性である以上、感染はしているはずであるため、シカの免疫力が高くウイルスが繁殖しにくい、または早期に抗体ができるため検出されにくいと考える。SFTSウイルス感染の可能性を軽視し、安易に心配ないとの印象を与えるべきではない。(矢原委員長)

→ウイルスが全く繁殖しないということではなく、指摘の通り感染すればウイルスは体内に存在している。増えない、あるいは早期に排出されることで検出されないケースは十分あり得ると認識しており、今後も注意する。(鈴木委員)

✓ ヤクシカの栄養状態と生態

・シカは栄養不足の状況にはなく、生理学的には増え続ける可能性が高い。矢筈岬で高密度化していた時期の調査では、シカは腎脂肪を十分に蓄え、胃には餌が豊富に入っていた。その後の研究で、落ち葉や落ちてくる新鮮な枝などを食べ、それが栄養として十分に足りていることが判明している。(矢原委員長)

■議事(5)モニタリング調査項目

資料5-1～3(環境省)

✓ 侵略的外来生物等の増減や分布変化

- ・ガジュマルやアコウの実は在来種か。また、それらを餌とするハムシは外来種か。在来種であれば、これまでどのようにコントロールされてきたのか。(湯本委員)

→イチモンジハムシは 20 年前に屋久島に移入し、主にクワ科植物を食草とする。屋久島中に蔓延し、手が付けられない状況で、外来昆虫では最も多いと考えられる。その他、ヤシゾウムシ、バナナゾウムシ、ソテツにつくシジミチョウもあり、徳之島ではソテツにカイガラムシの移入種が出ており、昆虫被害は多方面で増加傾向にある。(荒田委員)

→農業害虫やソテツにつくシジミチョウは存在するが、ここは世界遺産内なので、アコウ、ガジュマルは自然林の重要な要素であり、サルや果物を食べる小型鳥類にとっても重要である。この状況は初めて聞いたため実態は不明だが、注意が必要だと感じた。(湯本委員)

- ・日本におけるイチモンジハムシとオキナワイチモンジハムシの分布状況、特に屋久島での両種の存在と、イチモンジハムシが以前からいたのか。(矢原委員長、松田委員)

→屋久島には 2 種のイチモンジハムシが存在する。オキナワイチモンジハムシは新たに侵入した種である。イチモンジハムシは以前からいたが、低密度だったものが近年増加した可能性が高い。さらなる調査が必要であり、環境省にも検討をお願いする。(荒田委員、矢原委員長)

✓ タヌキとネコに関する質問

- ・タヌキは 2000 年頃の検討会でヤクシカより重視され、1992 年の初確認以降カメラモニタリングで大川林道高所でも確認されていた。ネコも同林道 1,000m 付近で問題視された経緯がある。当時の環境省資料をレビューし、1992 年以降の経緯を次回委員会でまとめるべきである。(矢原委員長)

- ・2009 年以降ヤクシカ対策が優先されタヌキに手が回らなかったが、今後は農業被害が出て全島に広がるタヌキの現実的な密度を検討する。まずはこれまでの経緯整理が第一歩である。(矢原委員長)

- ・タヌキは生態系影響だけでなく感染症影響もあり、ワンヘルスの視点から検討すべきである。ネコも SFTS が問題となっており、獣医師がネコから感染し亡くなった事例もあるため、ノネコの問題や地域ネコの活動も含め幅広く考えるべきである。(鈴木委員)

→SFTS 解析者はウイルスのチェックに対応可能であり、必要であれば繋ぐことができる。(鈴木委員)

✓ アブラギリの生育状況

- ・西部地域の世界遺産地域内でアブラギリが著しく増加しており、生態系管理上の問題がある。環境省の取り組み教えてほしい。(手塚委員)

→環境省としては、西部地域に多くのアブラギリがあると把握しているが、全体対策は困難であるため、まずは植生保護柵内の駆除を優先している。エリアが広範であり継続的な取り組みが必要である。(環境省 竹中首席企画官)

- ・西部地域の県有林が広範囲であり、県有林内においても対策を具体的に戦術的に考えるべきではないか。(手塚委員)

→県有林内や県道沿いには多くのアブラギリが存在し、効果的な対策はなかなか難しいと感じた。道路改良工事などの際に可能な範囲で駆除を検討するなど、何ができるか県としても考える必要がある。屋久島事務所と相談する。(鹿児島県 川瀬課長)

- ・西部地域はシカの密度が高く裸地化しているため、アブラギリが繁殖しやすい状況である。世界遺産地域内なので、もっと力を入れて実施すべきである。アブラギリは重要な指標となる樹木である。(手塚委員)

→アブラギリの分布は1,000メートル以上では見られない。ヤクシカの密度が高いほど多く、伐採後の対策を誤るとむしろ増加する可能性がある。完全に伐採しても個体数を減らせるものではない。パイオニア種であり永続的に増え続けることはないため、西部の森林全体の遷移の中で、現実的な低密度化の目標を立て、全てなくす必要はないと考える。(矢原委員長)

- ・シカの高密度が続く限り、アブラギリの増加も遷移の過程で続いていくと考えられるため、シカの対策とリンクして考えるべきである。(手塚委員)

→生態系管理目標はアブラギリではなく、ヤクシマオナガカエデなどの在来種の更新を促すことである。アブラギリを減らすだけでなく、在来種が更新する状況を作れば、いずれ屋久島らしい自然になる。(矢原委員長)

→遷移でほとんど消え、新たには定着しないと考える。(湯本委員)

✓ アブラギリの種子散布

- ・西部林道でタヌキが種子を食べるのが目撃され、分布拡大しているため、タヌキも散布者であるのか。

(屋久島森林生態系保全センター 古市)

→アブラギリの種子は大型だが、鳥やネズミによる散布も推測され、多様な散布者が関与しているため、タヌキだけとは考えにくい。タヌキが食べれば種は損傷すると考えられるが、果実中の種子自体は小型である。この点については調査が必要である。(矢原委員長)

・最初に導入されたタヌキの頭数は約8頭とされ、10年間程度のシミュレーションが実施され生態学会で発表されている。(手塚委員、九州自然環境研究所 塩谷)

→それらの情報を含め、これまでのレビューをしてほしい。(矢原委員長)

✓ タヌキの生態系への影響

・タヌキの分布レビューやGPS記録はあるが、生態系へのインパクト情報が不足しており、対策検討のため評価手法(胃内容物調査、DNA分析など)について教えてほしい。(環境省 渡邊課長)

→屋久島のタヌキ生態系影響評価研究を公募し、国内外の専門家に研究機会を提供することが有効である。(矢原委員長)

→タヌキの種子散布に関する過去研究があり、屋久島でもアブラギリ等の種子が糞から見つかるなど、種子散布者としての役割が興味深い。ため糞により調査も比較的容易である。(湯本委員、手塚委員)

■議事(6)その他

✓ 国立公園計画の見直し

・20年間未実施の国立公園計画見直しについて、低地照葉樹林の重要性や世界遺産登録の可能性を含めた進捗を教えてほしい。(手塚委員)

→屋久島国立の公園計画(屋久島部分)は20年間未変更であり、低地照葉樹林の重要性や希少種確認等を踏まえ、区域拡張や地種区分変更などの見直しを行う予定である。(環境省 竹中首席企画官)

→昨年度から自然環境調査を実施し、国有林や海域の関係者らと意見交換を進める。科学委員会等にも進捗を報告し意見を求める予定。(環境省 竹中首席企画官)

→林野庁森林管理局や森林管理署とは既に相談を行っており、具体的なエリア案を提示して協議を進めていきたい。(環境省 竹中首席企画官)